

センターだより

保存版

特別号 VIII (2010) [教育相談特集]

平成22(2010)年
12月2日発行
吹田市立教育センター
吹田市出口町2-1
TEL 06-6388-1455

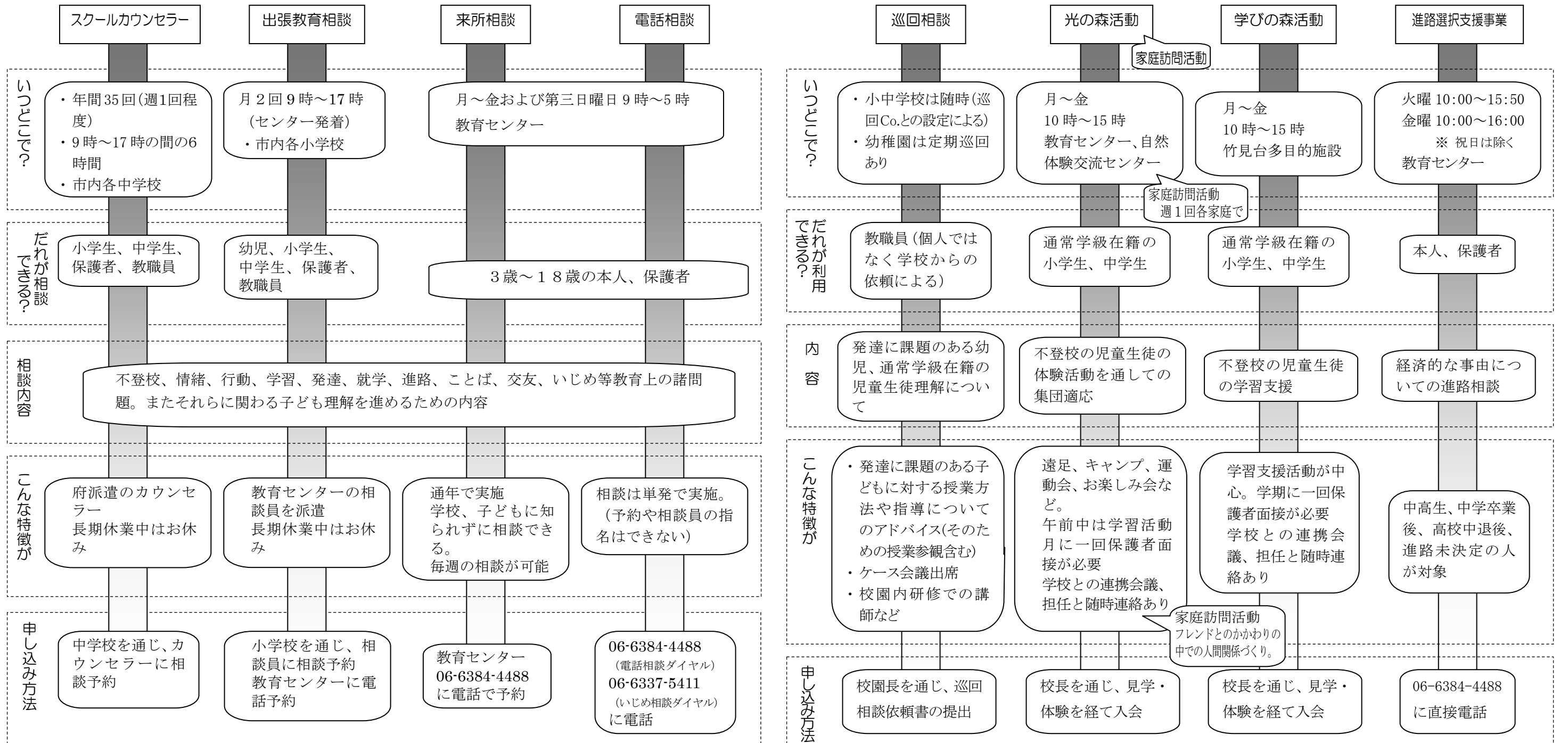
活用してください!

教育相談

各校園では子どもたちの「確かな学力」定着をめざして、さまざまな取組を展開されていることと思いますが、学習課題以前に「学び」に向きあう環境に困難を抱えている子どもたちがいます。そんな課題を解決するための支援となるのが「教育相談」です。平成21年度(2009年度)には延べ17,000人あまりの幼児・児童生徒・保護者・教員が教育相談を利用しました。

今号では学力を支え、子ども理解をより深める「教育相談」をさまざまな角度から紹介し、活用していただくためのヒントを提示していきます。それぞれの内容をご覧ください、教育相談の効果的な活用をお願いします。

吹田市立教育センターの教育相談事業



※ スクールカウンセラー、出張教育相談、来所相談を重複して受けることや、他の機関での相談と出張、来所相談を並行して受けることはできません。それは、それぞれの場から少しずつ違ったアドバイスがあった時に、相談者に混乱をもたらすことがあるからです。

親子関係を変えるきっかけに…

中1のAさん。小学校中学年ころから母親に対して反抗的な態度をとっていました。母親の言うことに反発することが多く、宿題は全くやりません。家では、ちょっと身体がぶつかっただけで「痛い！」と怒っていました。母親の疲労感は大きく、押さえつけることばかりに目が向いていました。しかし相談の中で、Aさんは強がっているように見えることや、反抗している態度の裏に何か本当に伝えたい気持ちがあるのではないかということ話し合いました。その中で母親は、実はAさんの姉に手がかかり、Aさんにゆっくり関わる時間が持てずに来たことを語りました。本当は甘えたい気持ちを素直に出せないのかもしれないということに気がつき、以後、Aさんが怒った態度を取ったときには「～が嫌だったのかな」と気持ちをくみ取って言葉で返すことを心がけました。すると、自分の気持ちを分かってもらえるのが嬉しいのか、Aさんの態度にも変化が見られ、身体がぶつかっても素直に「ごめん」と謝ったり、「一緒にお菓子食べよう。」と甘えてくるようになりました。そして、「お母さんがお姉ちゃんのことばかり見てるのがイヤ。」と、自分の本音を母親に伝えることができるようになり、それとともに反抗的な態度は収まっていきました。

こうして保護者は行動の裏にある子どもの気持ちを理解することで、落ち着いて子どもに接することができるようになりました。視点が変化することで対応も変わり、子どもも変化していきます。保護者に落ち着いて子どもに関われるようになってもらうことも相談の大きな意義なのです。



「感情」を引き出すということ

4年生のBさんは今まで反抗することなく来ました。ある日、母親がBさんの好きなキノコを出すと、突然「キノコ嫌いなんだ。」とポツリ。「え？今まで好きだったでしょ？」「我慢してたんだよ！そのくらいわかれよ！」と目つきが変わって怒りだしました。それから学校でも些細なことで友達とけんかするようになり、「なんでそんなことするの？」「どうしたの？」「言いたいことがあったら言うてみて」と周りがBさんに尋ねても、Bさんは「別に…」というだけです。

困って相談に来たお母さんとBさん。「何かイライラしているのかな？」「みんなにいろいろ聞かれて困った？」と相談員は遊びを通してBさんに問いかけて行きました。人形を病人に見立てBさんは人形を助けたり、ある時は「薬、なくなった」と人形を投げ出しました。

Bさんの家には病気で寝込んでいるおばあちゃんがいまして、おばあちゃんの看病もあり、家族で出かけることも少なく、お母さんも忙しそうでした。相談員は「Bさんは人形(おばあちゃん)に元気になってほしい気持ちと、なんで遊びに行ったりお母さんと話す時間をとるんだと腹が立つ気持ちと、そう考えちゃう自分にびっくりする気持ちといろいろあって、イライラもやもやしていたんだね」と伝えました。人形を抱きながらじっとBさんはうずくまりました。その後、Bさんの攻撃的な言動は収まって行きました。

子どもは様々な言動を通して、自分でもわからない気持ちや状態を大人に伝えようとしています。それを「聞きだす」のではなく、伝えたい「感情」として「引き出す」事が大切だと思います。周りが考えたり、感じたり、イメージしながら、ぴったりした言葉で理解したことを子どもに伝えられると、少しずつ子どもに変化が見えてくるのでは…と思います。



惜しかっただけなんだ！ ～情緒と発達について～



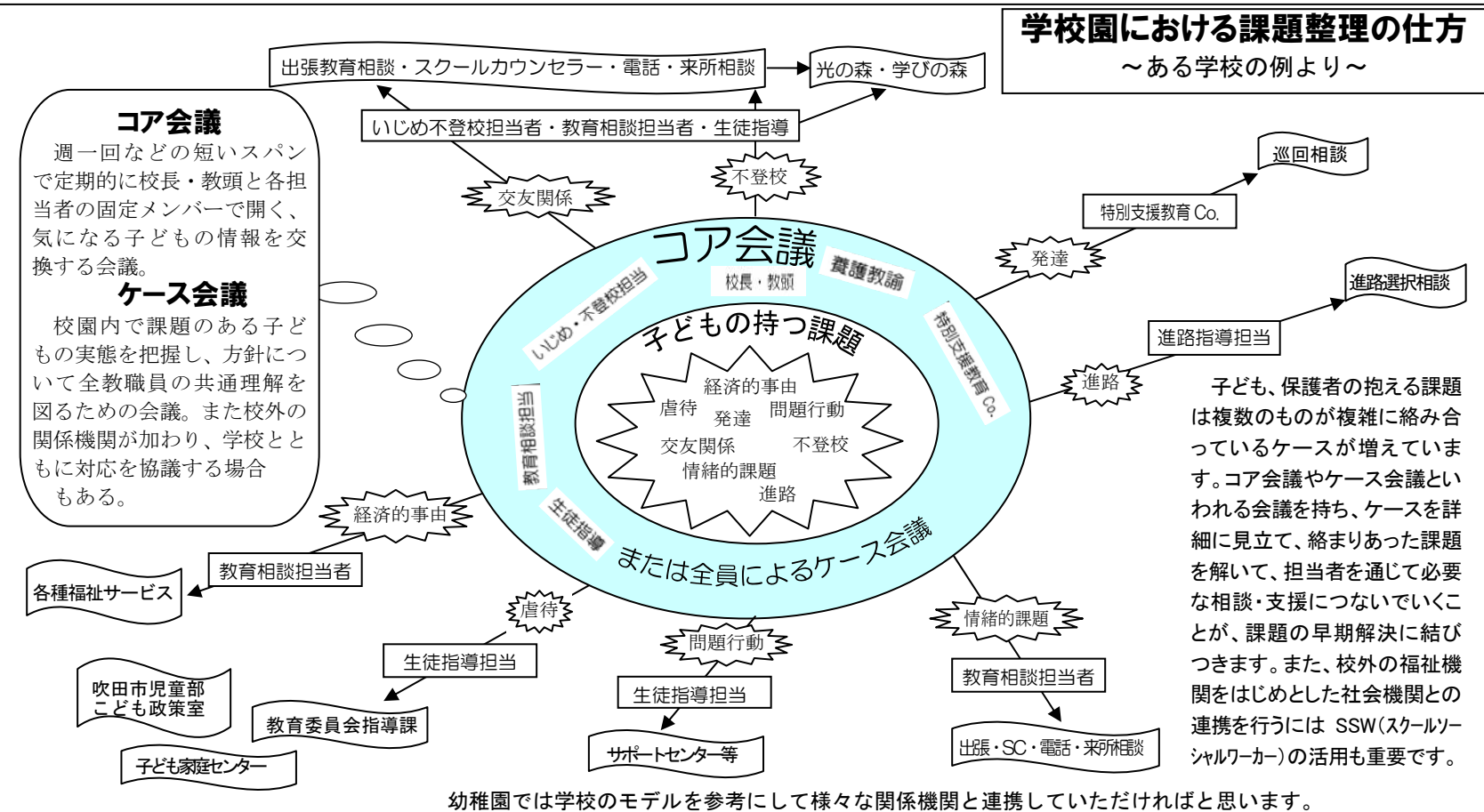
学習の遅れが気になり、母親と来談した小学5年のCさん。テストの点数はほとんど取れず、勉強にも自信がなく、友達作りもうまくいきませんでした。発達面や理解力に心配があった母親の希望で発達検査をすると、能力は高いが極端なアンバランスを抱えているタイプだと分かりました。検査も含め、何回かCさん自身と来談したある日、テストの束を持参してきました。Cさんは「私こんなできないねん」という気持ちです。しかしCさんの持っている力からすると、点数に反映されておらず、全くできていないところばかりでなく、ちょっとした間違いも目立ちました。そこで、相談員がCさんのがんばった気持ちを励ましつつ「Cさん、こことっても惜しいね。」とできているところに着目した声掛けをしました。

後日、母親から「先生が惜しいねって言ってくれたの。私、できないんじゃないって惜しかっただね。」と、とても嬉しそうな様子で意欲的に勉強に取り組むようになったと聞かされました。こうして自信と意欲を回復したCさんは、自分の苦手なところに少しずつ気づけるようになり、そのことが自己理解を深め、人間関係にも生かせるようになっていきました。

本当の気持ちを解き放つ ～不登校から学校復帰へ～

小6のDさん。お腹や頭が痛いと言うことはあっても、休まず登校しトラブルなく学校生活を送っていました。とても気遣いのできる子で「ありがとう。」と感謝されるのが嬉しくて、友達が嫌な係になったときにはやりたくなくても頼まれるとやっつけてあげていました。しかし、突然「学校に行きたくない。」と学校を休み始めました。理由がはっきりせず、Dさんは何も話しません。休み始めてからはイライラし、母親に「うるさい！」「ほっといて！」と口答えすることが急に増えました。

困り果てた母親は、担任に相談し、担任は家庭訪問をし、Dさんに電話するなど一生懸命関わりましたが、Dさんは担任と会うのを拒否しました。担任は母親に教育相談を勧め、教育相談に通うようになりました。そんな状況でもDさんは母親がつらそうな表情をしていると「大丈夫？」と心配し肩をたたいてあげるなどわがままも言わず、相手の喜びを自分の喜びとしているようなところがみられました。相談員は母親とDさんの特徴や思いを共有し、今は登校刺激を控え、我慢していることがあればそれを汲み取って言葉にしてあげてを提案しました。すると、Dさんの苛立ちは収まり始め、ゆったり過ごせるようになり変化していきました。同時に不満や今まで我慢していたことを話し始め、「今、学校で何の授業してるんやろ？」と自然と学校へ目が向き始めるようになりました。こんな様子が面接で母親から話されたため、登校刺激を再開しました。初めは困惑していたDさんでしたが、担任の家庭訪問を楽しみにし始め、しばらくすると自分から学校へ登校し始めました。



「虐待」を見つける目

小4のEさんは、毎日登校するものの、冬に薄着で登校してくるなど、季節はずれの服装をしたり、同じ服を何日も続けて着てくることがあります。友だちとのトラブルでは、感情を爆発させ、物を投げたり暴言をはいたりします。注意されると、嘘や言いわけが多く目立つ子どもです。落ち着いている時は、よく話しかけてきたり、くっついて甘えるような行動をとっていました。

ある日、腕にあざがあったので、理由を聞くと「自分でぶつけた。」と答えました。学校は以前にも同じようなあざがあったことや、家からの持ち物がなかなか揃わないこと、保護者と連絡がつきにくいことが気になっていたため、校内ケース会議に出張相談員を入れて検討することにしました。会議では、Eさんへの身体的虐待、ネグレクト、心理的虐待の可能性について話し合われ、本人の状態を詳しく知るため、服装や身体・行動の特徴、保護者とのやりとりの記録をつけることになりました。その結果、この状態が続けば、Eさんの精神的・身体的な発育に悪影響があるという状況にあったため「虐待の疑い」として指導課に報告することになりました。

夢をあきらめない ～進路支援選択相談を利用して～

中学校2年生のFさんは、父親を亡くしたことをきっかけに不登校になりました。教育相談担当者をする中で中3になってようやく登校ができるようになり、高校進学を目指すことになりましたが、遅れていた学習や経済的な面での心配があり、不安な日々を送っていました。教育相談から進路選択支援相談の案内もあって、相談をした結果、府育英会から入学金と奨学金、国支援金・府補助金からも授業料の支援を受けられることがわかり、私立校を受験できることになりました。そこから集中して受験勉強を続け、無事に合格し、今は、毎日元気に高校生生活を送っています。

※ この面の文章は事例をもとに教育相談員が執筆しました。